西成特集

釜ケ崎の子どもたち

執筆グループ

西田春彦
和歌山大学講師

光川晴之
大阪女子大助教授

仲村祥一
大阪商業大学講師

土田英雄
大阪学芸大学講師

村井研治
奈良学芸大学講師

☆人口と子ども
☆密集バラック地区
☆子どもと犯罪
☆〝どや〟の子どもたち
☆東萩という土地

人口と子ども

子どもの二五%は片親で、一〇%は親なし

西田春彦

カスパという言葉をご存知だろうか。スペインにある有名なスラム街のことなのだが、映画「望郷」の舞台にとりあげられてから一躍名を知られるようになった。まがりくねった細い通路。不潔と犯罪と貧困のうごめく暗黒街。映画を見られた方はカスパについてそのような印象をもたれたことと思う。

私たち大阪社会学研究会では、昭和三十四年の夏から今年にかけて、文部省の援助のもとに日本のカスパと呼ばれる、西成区釜ケ崎の実態調査を行った。

私たちの課題はスラム地区や不良地区の実情をくわしく調べてスラムを存続させている根本的な原因をつきとめ、適当な対策を講じて町を明るくするように処方箋をつくることにあった。

調査結果のなかから、特に子供たちに関係の深い問題をえらびあつめたのが本稿である。

——執筆者——

ここでのべる資料は標本抽出による西成区役所の住民登録票にもとづいている。調査は昭和三十四年七、八月に行われたが、一部は昭和三十五年七月に補足された。だから、この資料は登録上の資料であって、現実のすべての姿をそのままあらわすものではないが、現実を知る上では基礎的な知識を与えるものと考えてよいだろう。

西成区の釜ケ崎地区の人口関係の資料を、「人口の動きと人口の構成」及び「世帯構成と子供」について要約しよう。

一、人口の動きと人口の構成

昭和二十七年七月一日より住民票が整備された関係上、同年度より現在までの人口の動きをみると、

(1)昭和二十七年（六、八九七世帯）から昭和三十年（八、一七七世帯）にかけては世帯数はゆるい増加を示しているが、昭和三十年から昭和三十一年にかけて急激に世帯数は増加し、昭和三十四年八月では一二、九〇四世帯になっている。

(2)人口では、昭和二十七年七月一日では二六、二五四人から昭和三十年十月一日では三三、五四三人になり、昭和三十四年八月十八日では推定三五、五〇〇人である。

(3)一人世帯当り人数は昭和二十七年度では三・八人、昭和三十年度では四・一人、昭和三十四度では二・七人であり、世帯数の急激な増加は実は一人世帯の急激な増加らしいことがわかる。

(4)一人世帯は昭和三十四年度の調査では、三六・七%、二人世帯は二一・四%で、両者を合計すると全世帯数の五八%位にもなる。

(5)昭和三十四年八月現在登録世帯の約六〇%は昭和二十七年以来の来住者であり、昭和二十年以来の来住者全部では、全世帯の約八五%になる。

(6)本籍地・前住地等をみると、定着している世帯は一～二%程度と考えられる。（これらのことは同地が戦災で相当に焼失していることとかなり関係があるだろう。）

(7)除外された住民票については、昭和二十七年度より昭和三十四年六月末迄で、二四、五二四世帯あるが、釜ケ崎地区は五、九九三世帯（二四・四%）であり、西成区の方でも除外住民票がこの地区に集中していることになる。これにもかかわらず、登録住民票は増加している。

(8)居住期間は、現在登録している世帯は、平均八年半位であるが、除外住民票については、平均二年半余りである。

(9)除外住民票の四二・四%は一人世帯で一人世帯の移動が大きな部分をしめている

(10)念のため、昭和三十四年七月に行った現在登録している世帯の一%抽出の世帯について、一年間の移動を調べると、その対象世帯の三二%が除外住民票になっているし、約五〇%が一人世帯になっている。

(11)前住地・本籍地については、調査時現在の住民登録票および除外住民票では、大阪市を含む近畿地域が四〇～五〇%になっており、西成区内ということに地域をせまくすると、該当世帯は一〇～一五%位と考えられる。

(12)人口密度は、昭和二十七年度では一平方粁当り四二、〇〇〇人、一一、〇三〇世帯であり、昭和三十四年度では一平方粁当り五六、八〇〇人、二〇、六〇〇世帯になっている。

(13)男女の構成比率は、男が四九・六%、女が五〇・四%である。

(14)年令別構成は、第一表の通りで、一五才未満は約二四%である。（一%抽出による昭和三十四年七月現在）

第一表　年令別構成比率

%	年令
7.5	0～5才
7.8	5～10才
8.1	10～15才
6.9	15～20才
17.3	20才代
18.4	30才代
15.5	40才代
11.9	50才代
6.6	60才以上

二、世帯構成と子供

世帯を一人世帯、夫婦、夫婦と子供、母親と子供、父親と子供、世帯主と同居、その他に分けると第二表をうる。（一%抽出による昭和三十四年七月現在）

第二表　世帯の構成比率

%	世帯
37	一人世帯
8	夫婦のみ
25	夫婦と子
11	母と子
8	父と子
8	世帯主と同居
4	他

片親と子供の世帯は全世帯の二〇%位になるが、この二〇%の中には一五才以上の未婚の男女も含まれている。一五才以下の子供をもつ世帯が全世帯の中でどれ位になるかを第三表で示す。

第三表　釜ケ崎地区全世帯に対する一五才以下の子供をもつ世帯の比率

%	世帯
	一人世帯
	夫婦のみ
15	夫婦と子
5	母と子
3	父と子
1	世帯主と同居
	他

一五才以下の子供をもつ世帯全体に対して、母と子、父と子の世帯の占める比率はそれぞれ二〇%、一〇%で計三〇%位と考えられ、一五才以下の子供をもっていて親がいない世帯は、約一〇%と考えられる。

一五才以下の子供全体からいえば、両親のいる世帯にくらす者は約六四%、母親だけの世帯にくらす者は約二〇%、父親だけの世帯にくらす者は約七%、親のいない世帯でくらす者は約九%である。

以上を要約すると、一五才以下の子供は、人口のはげしく流出入をする、しかもその半数は近畿以遠の人々であるというような地域の中で、極度に密集した人々の間で生活しているといえる。そして子供達の約六五%位は両親と共にくらすが、後の二五%位は片親と共に、一〇%位は親はいないという暮しをしているといえるだろう。

密集バラック地区

過去を語らず、未来について計画のない彼等

光川晴之

日本の貧困には底辺がないといわれる。

釜ケ崎などはその好い例であろう。低い所得階層の人々が争ってここへ流れてくるのにはそれ相応の原因がある。

交通の便利はよいし、近くに盛り場がとりまいている。ドヤと呼ばれる簡易宿があってねぐらには事欠かないし、飲食店の物価は大阪一安い。古物商や質屋なども多いから庶民金融も楽である。

職業安定所が近くにあるから日雇いなどの求人の便もある。とにかく、同じような人々が群をなして住んでいるから顔がささないだけでも気楽なのである。

バラック地区に住む世帯の世帯主の職業は日雇いが大半である。たとえ〃常やとい〃といっても、給料の支払いは日雇い同様、日払いの形式をとるものが八割程度を占めている。しかも生活保護費、借金、賭金、売血料などを収入の中に含んでいるものもある。

家族の生計担当者は必ずしも世帯主だけとは限っていない。とにかく暮していくためには、夫も妻も、息子も、娘も働ける者は月のうち二十日ぐらいの仕事のために早朝から家を空けて出ていかねばならないのだ

家族生活をとりまく環境にも問題がある。どの家でも、水道や便所は共同使用であって、中には窓のない、ガラスを使用しない、トタンと板だけにかこまれた家もかなりある。このような家は昼なおくらい、不健康なものであって家と呼べるかどうか疑わしいくらいである。

多くの家が三畳一間であるが、そこに一世帯ずつというわけではない。二世帯が雑居している家もあるのだ。

子供の数は、夫婦そろっている世帯だけについていうと、平均二、三人である。このような環境で子供を育てなければならない親達は、職業の不安定なものが多く、また収入も固定していないために、精神的にも物質的にも不安な生活を営まなくてはならない。

質屋を常に利用する者とか、現在借金のあるものがそれぞれ居住者の半ば近くを占めていることからもこの事情は想像されよう。

また、ひどく困ったとき、頼るような親類縁者もなく、むしろ近所の人や民生委員に頼らざるを得ない人が多いことからも彼等の生活の不安定さがうかがえる。

× × ×

このように物心両面にわたってめぐまれない者どうしがお互いに相手を頼りにしながら生活しているのだから、普通の町に住んでいる人にくらべたら、人情が厚く、義理がたいという面がみられないでもないが、その反面過去について語らず、未来について計画のない彼等の間では正しい意味での近隣関係が発展するとも思われない。

狭い湿っぽい路地は、人、自転車の通路であるばかりか、炊事場を兼ね、洗濯物も干される場所である。しかも子供達にとっては、この陽の当らぬ路地裏が遊び場でさえある。ここで彼等は親が仕事から帰ってくるまでラムネ玉遊び、チャンバラ、ベッタン、かくれんぼ等に遊びふけるのである。

その日の生活の糧を稼がねばならないため、親達は子供のことに不本意ながらもかかわっておれないというのが実状である。中には親の無関心さの極端なものとして、すべての子供に平等に与えられている筈の学校教育でさえ、無籍に起因する就学不可能にまで子供を追いやる親もある。無籍のものの実数は容易に把握出来ない現状にあるが、これに原因をもっている不就学児童の存在が当地を含む西成地域での犯罪発生と無関係であると誰が断言できよう。

子供の年令と知力、体力とのアンバランス、集団的行為に対する不適応など身体的精神的発育不良の問題は、親の無理解無関心のみに理由を求めて手をこまねいていて

よいものだろうか。悪への芽生えはどんなに早く摘みとっても早すぎることはない。

不就学児童問題と同程度に解決しなくてはならないものに〃不在家庭〃問題がある。幸い両親がそろっていても、両親とも朝早くから働きに出ていくから、子供が学校へいく頃には猫の子一匹いるわけではないし、学校から戻ってきても温く迎えてくれる母親の手が待っているわけではない。

× × ×

両親のそろっている家庭でさえ、子供の不良化問題がおこるのであるから、ましてや不在家庭や、更に片親だけの家庭ではむずかしい問題がまちかまえているのは当然である。

最近、環境浄化運動がやかましく言われており、大阪市、西成区の当局、警察、保健所、市民館など各種機関並びに諸団体の協力によって推進されようとしている。一方、学校当局でも不就学児童問題、不在家庭問題などについて町内会、日赤奉仕団、婦人会、民生委員などに要請して強力な対策を推しすすめようと企画されていると聞く。

バラック地区の児童の問題は、家庭的、社会的あるいは、地域的な不利な理由がつみ重なって生じているのであるから、一部分だけの局地解決では駄目であろう。一つの問題を解くためにはそれと関連する他の問題をも併せて考慮しなければならない。子供たちのために綜合的な解決方式を積極的に推進してほしいものだ。

子どもと犯罪

〃食うためには何でも〃の異常なムードの中の子

仲村祥一

貧困は犯罪の苗床だといわれる。しかし西成区の通称釜ケ崎では犯罪が生活といえる。大なり小なりの違法行為は日常茶飯のことどころか、ある人達にとっては（そしてそんな人が非常に多いのだが）それなくしては生きられないめしの種なのだ。

敗戦後の混乱時代に日本の津々浦々を支配したあのドス黒い無秩序、〃食うために〃という異常に頽廃したムードが圧縮されて、ここに存在する。ヤミ米など食べないと頑張って死んだ判事さんのように、飢してもトウセンの水は……といった人達も沢山いる。

しかし、ABC放送の〃どん底の町釜ケ崎〃、読売テレビの〃大阪野郎〃に描かれた濁った悲しい世界はうたがいもなくここに実在している。

スラムの子供が飲んだくれの親父を殺した事件が東京であった。そこ迄おいつめられた哀れな子供達へ、全国からの同情が集まって、某週刊誌は、〃何が彼らをそうさせたか〃を特集した。貧困、不良住宅、欠損家庭、閉ざされた遊び場など、スラム特有な病患が指摘され、地区に住む誠実な人達の〃灯ともし運動〃が賞讃された。

しかし、釜ケ崎（とくに東萩町周辺）の子供達を包んでいる空気は、もっと大変なもっと異様なものだ。

彼らのね起きする場所で、ヤクが打たれ、売淫される。彼らの遊ぶ場所で、（遊ぶ所など本当はないに等しい）私設軽輪屋が予想表を拡げ、何処からともなく運ばれてきた自転車が取引され、ヤミタバコ、ヤミ焼酎（バクダン）が公然と横行する。

雨にたたられた一日をニコヨン母さんに手をひかれ行くパチンコ屋は、景品の現金換えを支柱にする小モナコであり、空腹をかかえて子供達がさまよう夜の街は、ポン引とシケ張、オカマと娼婦の追っても追っ

ても帰ってきて佇立したむろするところである。

読売新聞が六・三・三制と名づけた非行青少年のグループに属する若もの達は、「ほとんど罪の意識を持たない」と警察の資料が指摘している。罪の意識のないところに結果するものは一目リョウ然、非行と処罰とのイタチゴッコ、悪循環しかない。

売防法違反で何回目かの検挙をうけた母親が、「食うためには仕方おまへんやろ」と逆襲し、少年達（東萩町付近の安宿に住む子供が中心）に飼犬盗をシソウした大人達が、「子供は警察に捕まえられてもすぐに帰して貰えるから安心して良い犬を連れて来い。どんどん買ってやる」と囁くような見事な新世界に、正邪、善悪のけじめをつける習慣など育ちそうもない。

〃大人は判ってくれない〃とかいう映画があった。生活に追われて判ろうにも判りようがない大人達、判っていてもどうにもしようのない大人達がここには群れている。

子供達も、そのことを知っているのだろう。だから、学校に行きたくなくなり、花売りやおみくじ売り、ノミ屋の手先など甲斐しょうあるところをみせたくなる。

大人をも含めた自分達の生活を守る独自の小犯罪文化地帯の中で子供達は呼吸している。

躾けや道徳教育、生活指導や校外補導などのたゆみない努力（私は先日、東荻町の職安付近のみすぼらしい仮小屋の板ベイに子供会の遠足の通知がうす汚れて風にゆらめいているのを感動してみた）、警察や行政当局の必死の苦心・施策もノレンに腕おし、柳に風、焼石に水とはね返し、いぜんとして、アブラ切った無法の世界でガメツク生きていく人々とともに子供達はねばり強く賢明に（？）自らの生活のスベを日々習得しつつある。（飼犬盗の少年達は、警察の資料によれば、一匹の犬を盗むのに長いのは二カ月もかけて飼い手なづけ、あるいは、飼い主を甘言で欺く忍耐心と知性（？）を発揮した末やっと手に入れている。）

少年非行は年毎に集団化しているという。集団が大きな力であり、統制が能率であり、象徴（服装、バッジ、会の歌等）が誇りであることを少年達は知っている。大人達の作った小犯罪文化の中に、子供達は自分達の第二軍を編成し、頼りにならない大人達をしりめにかけようとする。

通称釜ケ崎のすべてが、擬似カスパなのではない。しかし、東萩町を中心とした子供達の生活環境は、全く文化国家とか児童憲章などという言葉が恥ずかしさのあまり死ぬほどのものである。

〃大いなる悲観は大いなる楽観に通ず〃などと私達はいっていられるであろうか。子供達を含めた大人の世界そのものの福祉、根源からの清掃なくしては、善意あふるる町の人、教師、警察当局の汗みどろの灯ともし運動も、次々とあえなく吹き消され、ふみにじられて行くほかはないと思うが、どうであろうか。

〃どや〃の子どもたち

学校というものは遠い世界の〃オトギ話〃

土田英雄

わたし達は案内されて、ある一軒の〃ドヤ〃を訪れた。

ベニヤの安っぽい扉を押して土間に立つと、天井の低い薄暗いジメジメした〃たたき〃の通路をはさんで、両側にマッチ箱のような区劃がならんでいる。一つの区切りは、およそ四畳半位。廊下からの入口には障子もない。室内はまる見えだ。

だがこの四畳半位の室が、また風変りな作りになっている。ちょうど農家の〃かいこ棚〃そっくりに、室の両側に二段ベッドが合計四ツある。その一つは、広さ畳一枚半位。寝台の上では、首をまげて坐っているのがやっとといった状態である。

汽車の三等寝台より、一寸広いだけのこの空間に、なんと親子三人が生活していた。父親も母親も、病弱な身体にむちうって日雇いに出ては、辛うじて息をつないでいるという。

今年七つになるという一人息子は、むくんだような顔をして、学校へも行かず、外へもあまり出ずに一人ぼっちで一日中この狭いベッドの上で、ごろごろしている。

この子供にとって学校というものは、どこか遠い世界の〃オトギ話〃にしかすぎないのであろう。ただ、親とともに生きているというだけの毎日、それも日に日に肉体と精神をむしばんで行くような生活、人間としてのすくいは、どこにも見られない。

こんな子供たちが、この同じ〃ドヤ〃にも、十何人といる。学校へまともに行っているのは、ただの二人だけという話。もっとも元気な仲間は、ベッドでごろごろしないで、あちらの路地裏、こちらの物置で、小悪党ぶりを発揮して、子供らしいエネルギーを、なげかわしい方向に発散している。

私たちは、救いようのない気持で、もう一軒の〃ドヤ〃をたずねて見た。この家は、大通りに面して、体裁も立派、造作もしっかりしている。

かなりととのった玄関の式台をあがって、ある一間に通された。広さは三畳、一応障子で仕切られて、狭いながらも独立の部屋の体裁をとっている。もっとも表に面する窓わくには、頑丈な格子がはめられて、一寸した座敷牢の感じがする。

ここもまた夫婦と小学三年の娘の三人暮し。何一つ世帯道具らしいものを持たないジプシーのような親子がいた。しかもこの〃ドヤ〃に落ちついて早や十年になるという。

子供にとって、この〃ドヤ〃こそ出生地であり、また現住地でもある。親もこの子のためには必死だ。しかし、しがない日銭かせぎの身の上では、まとまった敷金をつくることも出来ず、一軒の家はおろか、二階借りや、一間のアパートさえ借りることがままならない。

彼等の生活で、ただ一つのすくいは、子供がまがりなりにもランドセルを背負って学校へ行っていることだ。

この二つの対照的な〃ドヤ〃、そしてそこに展開される子供達の生活、一方はどん底の生活の中に押しひしがれて行く姿、もう一つは、そこにあえぎながらも、とにかく学校を続けている姿、この二つの生活はいずれも早急に解決しなければならない多くの問題をもっている。

その第一は、まず住居の問題だろう。極端な過密居住は、一人前の大人にとっては勿論のこと、発育ざかりの子供達にとってゆるがせに出来ない問題である。

そもそも〃ドヤ〃とは、公式には〃簡易宿所〃とよばれ、通称〃やど〃〃御宿〃、くだいて〃ドヤ〃とよび旅館と下宿アパートとのあいのこである。

標準的な形態は、一室三畳定員二人で一泊一人百円になっているが、はじめに説明した、寝台式、また大部屋式などいろいろあって、料金も最低三十円からある。

このような〃ドヤ〃が約二〇〇軒足らず、西成は釜ケ崎と呼ばれるかいわいに集っている。それはめしや、古着屋等とともに、この地区のシンボルでさえある。人間にとって生活の基本たる衣食住を、きわめて安直にみたしているのが、この〃ドヤ〃

総　数		2,474人
老　人		94人
30代～50代		1,458人
20　代		596人
青少年		109人
こども		217人
内訳	就学前	97人
	小学生	54人
	同不就学	22人
	中学生	17人
	同不就学	27人

であり、〝めしや〟であり、〝古着屋〟なのである。そして約一万五千人といわれる〝ドヤ人口〟がここにたむろしている。

現在〝ドヤ〟は、大阪中でその九割までがここ釜ケ崎に集中している。ここ元今宮地区に、昔の木賃宿が集るようになったのは、明治も末からであった。大正・昭和にかけて、北の長柄とともに有名になった釜ケ崎地区は、都市の発展、アベノ付近の繁栄と共に、戦後ますます有名になってしまった。

ここで私たちの調査のノートから、この地区の〝宿〟に住む人たちの姿を子供を中心にしてのぞいてみよう。データは昨年の夏の某日、三九軒のドヤに泊っていた二、四七四人について調べた結果である。

全体の約六割は三十～五十代の壮年者で、しかも男が大半（女一人に男三人の割合）であるが、一〇〇人たらずのとしよりを上廻るところの全体の一割近い二一七人の子供が、大人達につれられて〝ドヤ〟住いを続けている。

子供達の半分近くは片親だけしか知らず、学校へ行っていない子が、小学生では約半分、中学生ともなると、逆に倍近くにもなる。

この子供たちの一部が、たとえまがりなりに学校へ行っているとしても、その生活環境、とくに居住の条件は決してゆるがせに出来ない。まして、今あげたように多数の不就学児童が社会の日陰ものとして、かなしい親たちとともに、陽の目にも浴せず、生きて行かねばならないとは、何と悲しいことだろう。

いくつかの〝ドヤ〟をたずねて、そこにうごめく悲しい子供たちの姿をまのあたりに見た上、さらに冷厳な数字の物語る実態にふれるとき、私達は、今ここですぐにもしなければならない仕事が、余りにも多すぎるように思う。

東萩という土地

宿命的に打ちのめされた子ども達は再び親と同じ運命を辿るか

村井研治

地下鉄花園駅北出口より真直ぐに東へ入ると南海本線の高架につき当るが、このガードをくぐると急に何か異様な雰囲気を感じる。

東萩地区職安前の道路である。一見お祭か地蔵縁日における人出のような感じである。しかし、この人出の中に足を踏み入れて、今暫らく時が過ぎると、次にはお祭りの気分とはおよそ異ったものを感じだす。

お祭の気分、それは人の心を浮き立たせ、何か陽気に満ちている。しかし、両側に屋台じみ、露店じみた店が軒を連ね、その間にひしめき合っているここの人々、その人たちは決して浮き浮きとした気持でこの道路に立っているのではない。

では何のために？それはみただけでは全くわからない。ただ茫然と立っている。何することもなしに。

その日の職にあぶれたのか、それとも働く気がないのか、アイスキャンデーをかじっているもの、私設競輪の車券を売るもの、買うもの、それを取り囲むもの、見張るもの、だがただ黙々とつっ立っているものが多い。そう狭くもない道路だが、これらの人々によって所狭しとばかり埋められている感である。

彼等には陽気さがない。希望がない。一見にぎやかなようにも思われる人ごみに漂っているこの沈みきった雰囲気、それは来る日も来る日も漂い続けて、この地域を異常なまま、特殊なままで固定化している。

このネコのひたいのような小さな街に住む不就学児童のうち三十人ほどを昨年一民生委員の努力が実って今宮小学校へ入れることに成功した。

しかしそのあとがよくない。他の父兄の中から「くさい。ガラが悪い」というような苦情がたえない。学校という新しい集団に急に適応することのできなかったこの児童たちは、他の生徒や父兄から排斥され、適応できないままで再び脱落していった。

無籍のままの大人の人口すらつかめないこの地域である。不就学の子供の数もわからない。面積としては狭い地域ではあるが、大体ここに四十人余りの不就学児童がいるといわれている。しかし、案外その二倍もいるかもしれない。

ではこの不就学の子供たちは一体家で何をしているのであろうか。それもよくわからない。しかし、とも角彼等が稼ぎに出ていようが、遊んでいようが、それとも何をしていようが、近所もそれほど不思議に思わず、目にとまらないのがまたこの地域の特色でもある。

こんな特殊な社会、正常な規準には合わない社会にも決して暗い面ばかりがあるのではない。就学している子供も勿論多い。

家屋は密集し家は狭くても案外身ぎれいな服装をしている少年、タンスの上に京人形を飾って喜ぶ少女、隔離されたドン底の生活を営んでいるこの地域にも何か心の余裕を求めたいという人の気持がみられる。

「この辺の子供には心許せない。すぐにマンビキだから」とぶつつく菓子屋のおかみさんも、両親共稼ぎの一家の留守をする子供を家へ呼び寄せて昼食を食べさせる人情味がある。沈み切った暗さの中にも、ほのかな明るさと、温かさが感じられる。

宿命的に打ちのめされた子供たち、この環境の中で成人して再び親と同じ運命を辿ろうとしている子供たち。

しかし彼等はやはり子供としての夢をもっている。学校へも行きたがっている。しかも彼等は大人とちがってこれから人間として成人する未知数なのである。東萩町の子供の夢はいつかなえられるのだろうか。

特殊鋼・ステンレス

粟井鋼商事株式会社

社長　粟井岩吉

大阪市南区内安堂寺町三丁目二七
電話 東㊹2804～6・3663～4